

図工科の立体題材から生まれた共同製作—題材「そざいを生かして わたしたちのまち」(3年生)を通して—

蝦名敦子

本稿は、小学校における「校外学習と図画工作科の表現の関連」について実践的に考察し、その際、自然発生的に生まれた共同製作に注目しながら、本題材の立体題材としての特質について言及したものである。

2013年に弘前大学教育学部附属小学校3年生を対象に、題材「そざいを生かして わたしたちのまち」(立体)による授業実践が行われた。この題材は、20cm四方の木枠を自分の土地として各自にイメージさせ、ダンボールの素材を使って「わたしたちの町」を作るというものである。とくに授業最終時の鑑賞場面でそれらが一堂に集められた時、自然発生的に共同作業が生まれた。また、本実践は図画工作科の授業として行われたが、その導入時において社会科の校外学習とリンクさせている。小学校の特性の一つである校外学習が、どのように図工科の授業に反映され、子どもの表現が発展する造形活動となり得たのか。教師の指導法を含めた本題材実践と、子どもの共同製作的な造形活動の相互連関について注目した。考察の方法論としては先行研究として類似した題材である、虎尾裕氏の「段ボール紙による箱庭づくり」の論考を取り上げ、対比的に本題材との違いを明確にした。

自然発生的に生まれる子どもの共同作業には勢いがあり、この時期の子どもならではの表現活動として、友達同士で一緒に作る事が自然と行われている。成長するにつれて、次第に個の製作に終始するようになるのであるが、小学校ではこうした「みんなで作る」という共同作業への展開を、柔軟に可能にする独特の連帯感がある。これも小学校の特性の一つ、と言えよう。図工科は個としての自己表現を本来的に大切とするが、クラスと一緒に学び合う局面も教科の特性として現れる。本題材ではそうした可能性をもたらし、ここに図画工作科の表現活動が最大限に発揮された。

題材の特質として、第一に本題材はダンボール紙だけで接着剤を使用しないで立体に表すこと、すなわち材料と技法が制約された形で活動がなされることに趣旨がある。素材のよさや面白さを活かすことがねらいとされたため、子どもの中から工夫することによって必要な技法が生まれていった。第二に、題材名の「わたしたちのまち」からも窺われるように、社会科における校外学習での体験が町のイメージ形成に有効に作用した。授業の導入時から主題を強く印象づけることができたし、また全体的な活動になった時も再度、大きな町のイメージを具体的に掴むことに役立った。第三として、本題材の活動がこの時期の子ども同士の柔軟な連帯感を揺さぶったこと、が挙げられる。

それらが本題材の造形活動によって一体化して、勢いのある造形活動となったと考えられる。題材と材料や接合技法、生活意識を反映した子どもの実態がマッチして、子どもの想像力が十分に発揮された共同製作になった。それは子どもたちが実際に見た町を凌駕し、造形的に広がりのある大きな町へと結実していったのである。

[目次]

はじめに

1. 先行研究
2. 小学校の特性を活用した図画工作科の実践—校外学習
3. 社会科と表現：題材「そざいを生かして わたしたちのまち」（立体）（3年生）
4. 本題材の特徴
5. 造形遊びにおける「つながり」との違い

おわりに